

四ノ二 解脱鐘銘文

出典 笠置寺所蔵の現物による

解説 重源寄進には解脱鐘と称される。元弘の役で全てが烏有に帰した笠置寺に残る元弘の役以前の数少ない文化財で国の重要文化財に指定されている。

この鐘は口径六十七センチ、高さ百六十八・五センチ、その駒の爪の六ヶ所に深さ一センチの浅い切れ込みを造り、これによって六葉に擬えている点に特徴を持つ。

銘文の「大和尚南無阿弥陀仏」とは貞慶と親交のあった東大寺俊乗房重源のこと。駒の爪下面に銘のある鐘は珍しい。このような形式を持つ鐘は、長野県諏訪神社鐘に銘の一部が駒の爪下面にあるのが知られているだけである。

また六葉鐘も珍しく、重源の關係する寺に限って存在が認められる。重源がかつて国司上人として駐錫した周防阿弥陀寺の建久八年在銘の鉄製宝塔には

鐘楼 六葉鐘一口 堅三尺 口一尺八寸

と陽鑄されていて、いま実物は存しないが、当時六葉鐘が存在したことが知られる。また東大寺大勸進所鐘は笠置寺の鐘より若干大きい、全体の釣合、乳の形状とその数、袈裟襷の意匠、駒の爪に至るまで笠置寺のものと同極似する。重源の入唐の新知識をもって生み出されたのがこの六葉鐘であろう（以上 日本の梵鐘、角川書店、昭和四十五年による）。

この鐘には貞慶が冥官の招請によって法会の導師をした謝礼に持ち帰った閻浮壇金という砂金が溶かし入れられているとの言い伝えがある（山州名跡誌）

銘文 原文

第一区 笠置山般若台

第二区 新鑄華鐘 遠振梵響

願令衆生 發菩提心

第三区 建久七年丙辰八月十五日大和尚南無阿弥陀仏

第四区 (光明真言梵字十四字)

第五区 (光明真言梵字十字)

第六区 諸行無常 是生滅法

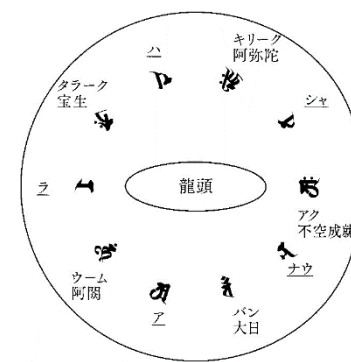
生滅々已 寂滅為樂

二〇〇二年の東大寺展にこの鐘が出品されたとき、梵鐘の笠上面に、竜頭の周囲を巡るように、金剛界五仏を表す梵字と文殊真言を表す五字の梵字が交互に等間隔で配されていた十個の梵字が陰刻されていることが新たに確認された。銘文は笠部上面にあったため、これまで注目されなかったものである

この銘文を中心にして二〇二三年の聖地南山城展において奈良国立博物館研究員三本周

作氏より一つの注目すべき論文が発表された。

解脱鐘の笠部 三本氏論文より



下線あり：文殊真言

下線なし：金剛界五仏種子

三本氏によると

重源は文殊信仰を有して三度にわたって中国に渡海したのは文殊菩薩の聖地である五台山（清涼山）に参詣することを願つての事であった。解脱鐘の笠部の梵字は文殊真言の梵字と金剛界五仏種子を結び付けたもので、五台山の五つの峯を文殊の五字真言と対照させたものである。

一方重源と親交が深かった貞慶は般若信仰を通じて般若台を造り、靈鷲山の般若塔を擬した十三重塔を造立したが、これらにも文殊菩薩の存在が重要な位置を占めていて、重源同様、貞慶も同じ信仰を有していた。

そして本品が笠置寺般若台に施入されたことの意義を「重源の文殊信仰を色濃く投影した本品は、一切衆生の発心を願つた笠置寺般若台および十三重塔にとって、人々を発心へと導く文殊菩薩の存在と重なることから重要な意味をもつたと思われ、本品の銘文に「願令衆生 発菩提心」とあったことの意味が、ここであらためて注意される」とし、また、「笠置の地を仏教の本源たるインド・中国の聖地に見立てる構想を打ち出した貞慶にとって、中国にわたった経験をもつ重源によって制作され、五台山の文殊信仰を体現した本品が施入されたことの意味は決して小さくなかつたと思われる」とする。